

『日本靈異記』における 法華經信仰について

高 佐 宣 長

『日本靈異記』（具名『日本國現報善惡靈異記』）は、三卷からなる日本最古の佛教説話集である。上卷三十五緣、中卷四十二緣、下卷三十九緣の計百十六の説話が収録され、各卷に序文があり、説話のうちあるものには△贊▽が附されてゐる。

『靈異記』全百十六緣のうち、法華經の登場する説話は全部で二十六緣にのぼる。このうち、法華經の靈驗や法華經信仰者の靈異等を主題としたものが、緣の表題中に法華經の名が見えるところのものだけを数えても、十二緣ある。法華經以外の佛教經典の名が標題中に含まれるのは五、六緣に過ぎないので、これだけのことから、『靈異記』に於いていかに法華經が重視されてゐるかを伺ひ得る。

『靈異記』中の、經典の靈異を記した説話を類別すると、①經典・經卷が自ら靈異を示した話。②經典を誦

持、書寫などして善報を得る話。③經典を信敬せず（あるいは經典信仰者を迫害するなどして）惡報を得る話。の三タイプとなる。このうち、法華經関連説話に特徴的なのは、③のタイプが目立つことである。『靈異記』中、このタイプに屬する説話は、上卷第十九緣、中卷第十八緣、下卷第十八緣、同第二十緣の四緣であるが、その全てが法華經の靈異を示す説話である。

③のタイプの信仰が、『靈異記』における法華經信仰の特色の一つとして指摘し得ることは、『靈異記』における法華經の引用の問題を考へても明らかとなる。

『靈異記』は、説話を記したのちに、△○○經に……と云ふは其れ斯れを謂ふなり△といふ形で説明することがしばしばあり、經典に限つてもその數は三十を超えるが、最も頻繁に引用される涅槃經が十數回引かれるのに對し、法華經が引用されるのは四緣に過ぎない。法華經を主題とした説話の多さを考える時、これは異様な少なさであり、（逆に『靈異記』に涅槃經を主題とした説話は見当たらない。）それ自體問題となる。

また、引用文そのものを見ても、③のタイプの説話の裏附けとなる、法華經を輕んずる者には罰が當たるとい

つた、法華經の中心思想とは言い難い内容の記述が目立つ。下巻第二十九縁の引用は、法華經教理の一特色をなす成佛思想を示す部分ではあるが、それを引用する縁自體は、やはり冥罰の説話である。かくの如く『日本靈異記』に見られる法華經は、それを輕んずると惡報を得る經典としての性格を強く有つてゐる。これは、日本古來の御靈信仰などとの共通性も考へられるところの信仰であると言ひ得る。

『靈異記』における法華經信仰の特色として、その他に、法華經を公寫すこと、の強調、觀者信仰等々が上げられるが、いづれにしても現世利益的信仰の文脈で考へられるものであると言はねばならない。即ち、公現報善惡の強調である。それによる信仰のすすめこそ『靈異記』の作者景戒の目的であつたと考へられるから、これは當然ではあるが、とは言へ、景戒自身には、多少はそれを超える法華經信仰があつたことは、各卷序文や、下巻第三十八縁などから知られるところである。

『上野郷主等御返事』の真筆と 系年について

寺尾英智

『上野郷主等御返事』は、日蓮聖人真筆の伝來が明らかではなく、『録内御書』をはじめ各種の『録外御書』にも収録されず、個別写本の存在も知られてはいない遺文である。『昭和定本日蓮聖人遺文』所収の同遺文の脚注には「【真蹟】形木1紙完高知要法寺藏（新加）」（一六二二頁）とあり、『定本遺文』に『上野郷主等御返事』を収録するに当たっては形木によつてゐる。ここからいう形木は、板木の意ではなく、日蓮聖人真筆を板木に模刻して紙に摺写したものである。形木は、版本とは異なり、真筆の書体、書風などを模した「真筆の写し」であつて、『上野郷主等御返事』のように真筆が伝わらない場合、真筆を窺い知る資料として文献的価値大なるものがあると考へられる。しかしながら、形木そのものについては、ほとんど言及されたことがないようである。そこで本発表では、『上野郷主等御返事』の形